
ただの生活記

鯖味噌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただの生活記

【Nコード】

N8697Y

【作者名】

鯖味噌

【あらすじ】

この作品は小説を読みながら作った作品ですので、その小説様に変化影響を受けております。もし不愉快に思われる方がおりましたら削除させていただきます。

また気ままに作った作品ですのでプロット等は存在しません。また東方自体も永夜抄と緋想天しか持っておりません。ですので更新は月に一度できたらいい程度です。後、知識はwiki頼りです。

1 ページ目

雑草や木の根が入り混じった混沌の様相を晒している荒れ道を荷台に乗りながら眺めています。

わたしの心情は最悪の一言でした。

荷台には私と何処から採ったのか、不思議な形をした茸が所狭しと並べられています。

出発前に、新しい靴で出かけようとした自分が憎らしい。

せっかく久しぶりの遠出だというのに、足には靴ずれができてしまい、荷台の中では不思議きのこ（わたし命名）が放つ異臭で景色を楽しむ余裕がありません。

「起きたか？」

突然声を掛けられたわたしは内心焦りながら初めに疑問に思ったことを聞きます。

「わたしが荷台にいるのは分かりますが、この大量の茸は？」

「森で採ってきた」

「森……？まさか魔法の森ですか？」

「他に森なんてないだろうに・・・。それより後半刻程で集落につくからそこからは自分で歩きなさい」

「もちろんです」

そうしてわたしは集落に近づくまでの半刻を、異臭と揺れによって常に喉元までせり上がっている酸っぱいものと戦うのでした。

摩耗してすり減った心を引きずりながら自宅のドアに手を掛けました。

「・・・ただいま」

人がおらず火の灯っていない家からはただ無音の返事が返ってきてきます。

父は集落に着くとすぐに大量の茸が詰まった荷台と共に自身の家へと帰って行きました。

机の上には今朝の出発前に作っておいたビスケットが置いてありました。

「今から夕食を作ると火が必要になるからこれで・・・」

あまり食べるタイプではないので今日はこれで済ませてしまいます。さすがにビスケットだけでは足りないなのでお腹がきゅーっと鳴ってしまいます。

「明日の朝は少し豪華なものを作ろう」

小さな決意をして就寝の支度を済ませて床に入ります。

昨夜は久しぶりの遠出で、定時には起きられないと思われました。幸いきつちりと定時に目が覚め、3分で着替えを済ませて荷物を掴んで部屋を飛び出し、朝食がわりに昨日の残りのビスケットを口に放り込んで颯爽と出勤・・・！

したところで目が覚めました。正午でした。

「えええつーー？」

遅れても出勤し、先生からのお小言と頭突きをいただくことが、本日の仕事になりそうです。

「はぁ・・・」

心からため息がもれだします。

寺子屋に到着したのは午後の2時でした。

「今日の授業は終わったぞ」

予想通りの言葉は、集落に一つしかない寺子屋にて教師を行っている先生。

「あ……おはよう、ごぞいます……」

「うむ、おはよう。もう昼を過ぎてしまったが」

と返事を返してきます。

これはおかしい。わたしは言葉を失い、しばし立ち尽くしました。

「ん？なにをしているんだ？」

「え、だって……」

先生の教育はスパルタ式。寝坊して遅刻しようものなら強烈な頭突きをお見舞いするはずなのです。それがないとはい、どうかしたのでしょうか？授業用の紙を忘れたときも、焼鳥屋さんとの約束に遅れた時も、欠かさずに頭突きをもらいました。それを忘れるなんて、あるかどうか……。

「生徒は帰ったし、プリントも出来てあるから今日は帰っていいよ」

今来たばかりのわたしに先生は容赦のない言葉を投げかけました。

「え……あ、はい。お疲れ様でした」

「うむ、お疲れ様。昨日は久しぶりの遠出だったのだろう？疲れが顔に出ているよ。授業は一人でも大丈夫だから疲れがとれたらきなさい」

いつの間にか数日の休みをいただいていたわたしは、その足で商店へむかいました。

野菜と干し肉、魚に漬物といった各種の食べ物を買い込み、自宅へと向かいます。

自宅と商店の途中には父の家があります。

父はいつもこの幻想郷内を徘徊し、なにか珍しいものを見つけては拾ってきて家に貯めこんでいます。

わたしは仕事が休みになったこともあって食材を自宅にしまってから父の家に寄ってみました。

「ん？どうした」

「いえ、先生からお仕事の休みをいただいたので昨日の苺を何に使うのかと・・・って、話の最中に本を読みだすのはやめてくれませんか？」

「鬼に会いたくてな」

本からインクの香りが漂ってきます。

「鬼ですか、実在するんでしょうか」

「豊かなイマジネーションで想像してみたらどうだ？」

「豊かすぎて、知らないことを考えると妄想になってしまったため、分からないことがあれば調べずに即質問します」

「わかった・・・もういい」

呆れた声でいいます。

「幻想郷には、かつて鬼が居たとされている」

父が本を読みながら言いました。

ふと本の題名が気になり覗いてみました。

「幻想郷縁起・・・」

「そうだ。幻想郷の歴史書には鬼の存在が確認されている」

「でも外で鬼らしきものを見たことはありませんよ？」

「地上ではな。だが彼らが退魔師や人の恐怖から滅されたという事実は確認されたことがない。伝承に曰く、鬼は人に対して愛想を尽かしたため地下に潜ったそうだ」

「愛想をつかす・・・」

「納得はできるぞ。鬼は嘘を嫌う。人は嘘でもつかなければ鬼とは戦えないだろう」

「ああ、それならありえますね」

「人は生きるために鬼に嘘をつき、鬼は嘘をつく人に愛想を尽かした。しかし人の心には鬼を知らぬ者にも漠然とした恐怖が存在する。その心が鬼を存在させていると思えば、人は鬼に対して向き合わねばこのままであるうな」

「結構調べてらっしゃるんですね」

「こんなもの探求にはいらんよ。それはもっと深遠なものだ」

わたしは父との会話の後、自宅へと戻り夕食をいただきました。

夜の帳が落ちる頃、わたしは父が鬼に会いたがっていることを思い出しました。

「鬼さんおいでませー」

わたしはそう願った後、昨日の疲れもあり床へとつきました。

わたし 〓 あの茸は結局なんだっ たんでしょ うか

父 〓 明日は何処へ行こうか

先生 〓 明日の寺子屋の準備をしなければ

焼鳥屋 〓 早く帰ってこないかな

鬼 〓 幼女の予定

作者が小説を読みながら適当に作りました。その為その小説様に大
変影響を受けております。不愉快だと思われる方がおれば削除させ
て頂きます。またこれは気ままに作った作品ですのでプロット等も
存在しません。更新は月に1度程度できればいいなと思っています。

1 ページ目 (後書き)

続きはないかもしれませんが

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8697y/>

ただの生活記

2011年11月26日01時50分発行